

河南省水泉石窟の研究

A Study On SshuiQuan Stone Cave Temple

胡 皓然
Hu Haoran

1. はじめに

(1) 研究背景

水泉石窟は、中国河南省偃師県寇店郷石窯関村の南 8 キロの万安山の断崖に位置し、北魏時代の洛陽城からの直線距離が 20 キロである^{注1}。石窟の西に沙河、北には洛陽八関の一つ大谷関がひかえる。石窟の奥行きは 9.5 メートル、入口が広く開いた縦長の方形の平面をもつ、自然の洞窟を利用したと思われる。1963 年に河南省の重点文物保护单位に、2003 年に中華人民共和国全国重点文物保护单位に登録された。

太和十七年（西暦 494 年）、北魏の孝文帝により、山西の平城（現在の大同）から河南の洛陽に遷都され、『洛陽伽藍記』には、洛陽城内の仏教寺院の数は千百六十七カ所にのぼると記され、その半数以上は皇室関係と官僚貴族、即ち、上層階級による造立とされる^{注2}。北魏が国家主導で推進した仏教政策による影響は、洛陽だけでなく、その周辺の地域にも徐々に広がりを見せるようになる。それらの地方で製作された仏教造像には、都では見られない、地方の世俗文化を反映した表現がいくつも認められることから、仏教文化が都の一部上層階級の官僚貴族の間でもてはやされていただけではなく、地方の民衆にまで強く影響を与え、浸透したことを物語る。

本研究では、首都洛陽での仏教造像活動の隆盛を受けて発展した、造営された小型石窟の一つである「水泉石窟」を対象として研究を行う。水泉石窟が開かれた洞窟が、当時どのような場所とされていたかは、現在することはできない。しかし、一種の聖地であったと考えられ、そこに皇帝、皇太后像のための像が彫り出され、また多くの龕が穿たれたことは、地方の仏教造像活動の一つの典型と考えられる。それゆえこの窟について考察を行うことは、地方の仏教造像活動を理解するため

の助けになる。

(2) 研究目的

水泉石窟に関する先行研究は、水泉石窟と龍門石窟との類似性に注目し、それら仏龕と仏像が龍門石窟からの影響を受容したことが明らかにすることに重点が置かれた。しかし、龍門石窟には見られない仏龕や造像も窟内には多く存在する。それゆえ仏龕と仏像の分析を通じて水泉石窟を再評価することが、何よりも必要な作業であると思われる。

従来、大型石窟の水準が高く、小石窟は、造像の殆どが、その模倣であるとの見解が支配的である。当然多く研究は、大型石窟のみに注目した。これまで大型石窟で構築されてきた北魏時代仏教美術の理解が、必ず正しいとは限らず、小石窟の研究が進むことにより、北魏時代仏教美術に対する新しい認識を見出される可能性がある。そこで本論は水泉石窟を地方石窟の一つ例をとし、小石窟に関する研究の可能性について考察を試みると考えられる。

(3) 研究方法と論文構成

2 章において石窟外側の碑刻（造像記）から水泉石窟の開鑿者、開鑿する目的、開始の時期、さらに北魏時代水泉石窟の周辺地域における仏教造像活動の状況が、大まかにあるが理解される。

3 章では水泉石窟中で彫り出された仏龕と造像を分類した。分類研究に通じて、水泉石窟で「外側壁面と北壁入口側壁面」と「南壁面と北壁面」という二つのグループに分けることができる。

4 章において、各壁面の仏像と仏龕の形式、他の石窟や造像碑との比較研究、及び壁面を造営するプロセスを中心とする分析を行い、各壁面の状況を明らかにする。

最後の 5 章では論文全体の内容をまとめた上、結論を説明する。

2. 石窟造像記

1980年温玉成氏は水泉石窟の調査を行った、その調査報告において^{注3}、石窟入口外の左側の岩面には、石碑形の区画を切り開いた一つの造像記が刻まれていることを明らかにした。石碑形の高さは210cm、残幅68cmであり、現存する文字数が515である。

この造像記の最も注目すべきは、「石窟の開



図1 石窟造像記 馬銘悦(北京大学)撮影

鑿者は比丘曇覆であり、曇覆が山に帰り隠逸した、自ら力をもって皇帝と太后のために、敬意を表して石窟を造った。」と記された点である。窟内の仏龕と本尊像の様式は龍門石窟古陽洞と近いとし、石窟内に「熙平二年(517年)」銘を有する仏龕が彫り出されていることから、水泉石窟は510年代後半に造られ、即ち孝明帝と霊太后のために造られた可能性が高いと考証している。

造像記の前半には記載された内容は、洛陽南部(今偃師市、伊川、嵩山)で仏教活動に関する記事であることが明らかにされている。その中の「一万仏」「五千仏堂」「千仏天宮」「一千五百龍華像」という語句から多仏信仰が窺われる。それに加え、『法華経』に見える十六王子の行像を造っている点も看過できない。このことから曇覆と多仏信仰との関連が確かめられる。

以上、造像記に通じて、水泉石窟の開鑿者は比丘曇覆、孝明帝と霊太后のために石窟を開鑿した、開始の時期は510年代後半、さらに北魏時代水泉石窟の周辺地域における仏教造像活動の状況が、大まかにあるが理解される。

3. 水泉石窟における仏龕と仏像の分類

先行研究では、仏像のみならず、仏像が入られた仏龕形式、またその両者の関係や全体の形式変化がどのようなものであったかを明らかにし

なくてはならない。そこでこの問題を明らかにするために、水泉石窟に彫り出された造像と仏龕の形式分析から考察を始めることにする。

(1) 仏龕の分類

劉景龍氏は、水泉石窟の仏龕の大きさに基づき、仏龕を分類し、高さ50cm以上の仏龕についての整理分析を行った^{注4}。高さ50cm以上の仏龕について、劉氏は、尖拱龕の数が極めて少なく、主尊仏像の両側に小さい仏龕を配置する特殊な形式が見られるなど、いくつかの重要な特徴を指摘している。50cm以上と以下で区別を行うことの是非はあると考えられるが、50cm以上は、一応大龕と認められる重要な仏龕を含むことから、本論では劉氏のこの観点を踏襲し、まずは仏像を形式分類し、さらに仏龕と仏像の組み合わせについての整理を行う。

50cm以上の仏龕において、A3式、B1式、B2式は主龕と付属小龕という二重の構造が見られ、A1式の仏龕が三間に仕切られ、主尊と両脇侍菩薩の彫り出される空間がはっきり分けられ、仏龕の構成が複雑であるという特徴を持つ。それに対して50cm以下の仏龕では、仏龕が付属小龕は造らず、彫刻した造形も簡略であった。

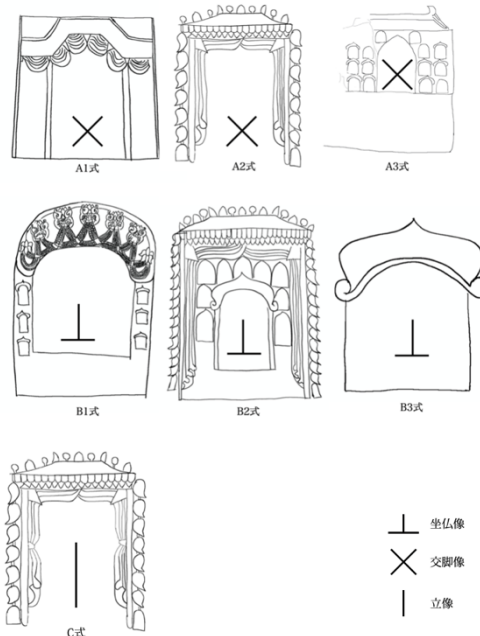


図2 高さ50cm以上の仏龕の分類 筆者作成

(2) 仏像の分類

「仏龕」とは、仏像を安置するために、岩面を穿って造られたものであり、仏像の装飾物と理解される。「仏像」は仏教の信仰対象である仏の姿

を表現するものである。そして、装飾物とする仏

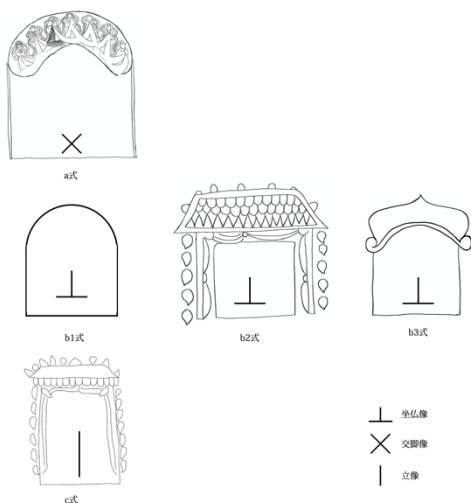


図 3 高さ50cm 以上の仏龕の分類 筆者作成

龕と、信仰の対象とする仏像の変遷は、同期していない場合がある。そうであれば単に仏像と仏龕の組合せに基づいて分類するだけでは、不十分であることが理解される。そこで、仏像自体の形式分類もこれに加えるがと考えた。

水泉石窟の中で、坐仏が 200 体以上を彫り出され、数が多く、交脚菩薩像より坐仏の形式が多様である。そこで以下においては、まず坐仏を注目し、坐仏を

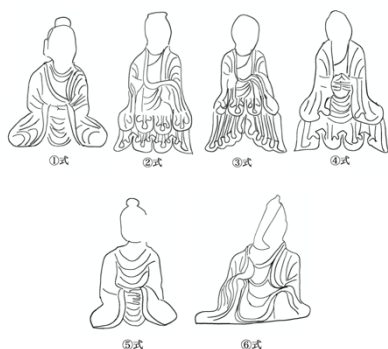


図 4 坐仏の分類 筆者作成

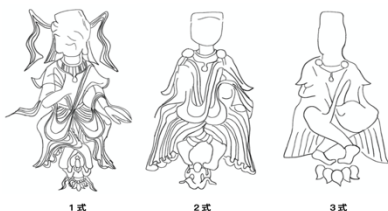


図 5 交脚菩薩像の分類 筆者作成

主として袈裟の着衣形式や彫刻技法に注目することで、分類作業をおこなうこととする。坐仏の分類において、袈裟の着衣形式によって、六つの形式がある。交脚菩薩像において、三つの形式がある。

水泉石窟の

中では、交脚菩薩像を主尊とする仏龕 (a1 式) も見られる。交脚菩薩像を主尊として仏龕 (A1 式と a1 式) の主尊造像がすべて 1 式を採用している。また、①式、⑤式、⑥式の仏像はすべて裳懸座を備えず、①式と⑥式における仏像の着衣において、混乱が多く認められる。

これに対して南壁と北壁は、50cm 以上の仏龕において、外側壁面と北壁入口側壁面に見られた A1 式が、南壁では一例も見られない。それに対し、A2 式、B1 式、B2 式、C 式など新しい形式が見られ、仏龕の形式も数が多い。50cm 以下の仏龕も同様で、b3 式は依然として見られが、天蓋龕と坐仏の組合せ (b2) の数が多く、高さ 20cm 以下の小龕では b1 式を多く採用する。なお、南壁と北壁の中で坐仏の数は圧倒的が多く、袈裟の着衣方における②式、③式、④式など、多く変化が現れる。

以上より、水泉石窟では「外側壁面と北壁入口側壁面」と「南壁面と北壁面」という二つのグループに分けることができる。この二つグループの区別は仏龕を彫り出された時期が異なる、工事に参加した工人の系統が異なる、それとも信者が変わったことに起因するなどの理由によると考えられる。この問題は石窟造営の過程に関連している可能性があり、壁面同士の関係を明らかにするには、各壁面の考察が必須となる。そこで次章においては、各壁面の仏像と仏龕の形式、他の石窟や造像碑との比較研究、及び壁面を造営するプロセスを中心とする分析を行い、各壁面の状況を明らかにする。

4. 各壁面の展開

石窟の東壁 (奥壁) には高さ 5 メートルの大仏が二体並び立ち、脇侍菩薩像など一切見

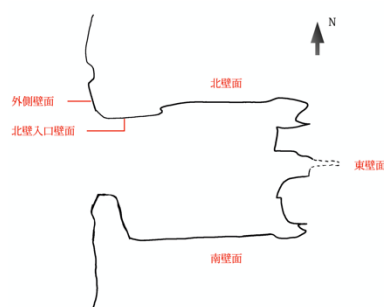


図 6 各壁面の位置 筆者作成

られない珍しい構成である。本尊立仏の両側の壁面 (南壁・北壁) には仏龕が多く並んで。なお、南壁に彫り出された仏龕の数が最も多い。また、石窟の北壁、入口付近は区画されて仏龕が並んでいる。本論では「北壁入口側壁面」と呼ぶことにする。このほか、石窟外の右 (北) 側の岩壁面の

仏龕がいくつか彫り出され、「外側壁面」と呼ぶことにする。

(1) 外側壁面

外側壁面第1龕、第4龕を注目する。

(i) 外側壁面第1龕

外側壁面第1龕は龍門石窟と類似している表現が見つかることができる。特に交脚菩薩像、宝繒と後頭部を覆う布の組合せは北海王元詳造弥勒像龕と同じである。また、交差した後の天衣が太くなり、裾を足と台座の隙間に押し込む点が邑主高樹造像龕や尹愛姜等廿一人造石弥勒像龕と類似する。それゆえ、第1龕は龍門石窟古陽洞の500年前後の形式を受容した可能性が高いと考えられる。

(ii) 外側壁面第4龕

第4龕の主導坐仏において、裳懸座は四つに分かれる形式で、中央上下二層にU字形を二つずつ作る。上層は腹前に垂れる袈裟、下層は裳であると思われる。この形式の裳懸座は、雲岡石窟第三期に多く見られる。

(iii) 小結

外側壁面は、龍門石窟初期造像と共通する形式を見つけることができる。また、雲岡石窟第3期諸窟の像と関連する裳懸座形式が見られる。

(2) 北壁入口側壁面

北壁入口壁面第8、9、15、20、21龕を注目する。

(i) 北壁入口側壁面第8龕

北壁入口側壁面第8龕は外側第1龕と同様、仏龕が柱によって三つの部分に分かれ、主導は交脚菩薩像であり、脇侍菩薩を左右の小龕内に配置するという構成を備えている。しかし主導交脚菩薩像の両側に維摩と文殊の浮き彫りが刻まれ、外側第1龕と比較してみると、維摩や文殊の表現がほとんど同じであるけれども、維摩が右側、文殊が左側に配置している点が異なっている。

維摩と文殊像は、光背の右に維摩、左に文殊の配置が古く、光背の右に文殊、左に維摩が新しい。左右の位置の変化は、雲岡石窟では第二期の第六窟前後であるとされる。龍門石窟では、およそ510年頃518年の間に、両者の配置される側が変わった。北壁入口側壁面第8龕の場合、維摩像が光背の右側に位置し、それを左におく外側壁面第1龕より造営時期が早い可能性があると思われる。

(ii) 北壁入口側壁面第9龕

第9龕で特徴的な表現は主導坐仏における袈裟

の着け方である。袈裟は腹前にU字形に垂れ、それを左腕で持ち上げ、袈裟の端を左腕に沿って垂らしている。この形式は、雲岡石窟第二期造像中で見られる。だがこの像には、左肩に掛けた袈裟が、腹前を渡る袈裟とともに左腕に掛かる形式を備えていた。この形式は、龍門石窟初期古陽洞天井第48龕主導などに見つけられる。それゆえ水泉石窟北壁入口側壁面第8龕主導坐仏は、雲岡石窟第五窟の着衣形式と、龍門石窟古陽洞に見られた漢民族式着衣形式が融合した結果、造り出されたものだと考えられる。

(iii) 北壁入口側壁面第15龕

第15龕の主導坐仏の裳懸座は右足先で袈裟及び裳をそれぞれ中央で二つ割り、その下の裾は、身体の前で打ち合わせられ、左右対称に広がるので、南壁の第19龕と類似している。

(iv) 北壁入口側壁面第20龕

第20龕は尖拱額を造り出され、尖拱額には、外側壁面第4龕と同じ、珍しい双翼文様を充填する形式を備える。

(v) 北壁入口側壁面第21龕

第21龕は50cm以下の仏龕であるが、主導交脚菩薩像と脇侍菩薩の表現が50cm以上の第8龕とほぼ同じ形式を備えている。龍門石窟古陽洞500年前後に現れた形式と近い要素を多く見つけられる。

(vi) 小結

外側壁面の中で、交脚菩薩像を主導とする仏龕は最も精緻な作りであり、それらの壁面の一番上に彫り出された。一方北壁入口壁面では、交脚菩薩像を主導とする仏龕の数が多くない。そして外側壁面と北壁入口側では、弥勒菩薩が重視されたことが知られる。造像の形式において、510年後半から造り始められた外側壁面と、517年に完成した北壁入口壁面には、龍門石窟で500年前後に現れた形式が採用されたが、龍門石窟の様式を採用するだけでなく、雲岡から伝えられたと考えられる形式も受容したと理解される。

(3) 南壁面

(i) 南壁の造営：亀裂と造像の制作



図 7 南壁の亀裂と整備痕跡
出典:『優師水泉石窟』筆者加筆

外側壁面や北壁入口側壁面と異なり、南壁の岩面には亀裂が多く、壁面をそれが破損している。これらの亀裂と仏龕との関係を明らかにすることによって、南壁の造営工事についても考察することが

可能になる。

考察に通じて、第 19 龕（及び付属小龕）と、そのしたの仏龕群の造営を完成した後、しばらく後西側に新たな仏龕を彫り出されたと考えられる。

（ii）南壁東側

南壁第 19、8、7、31、30、33、36 龕を注目する。それら中で「天蓋龕」と言われる仏龕を彫り出された。その天蓋は、屋形の棟上中央に、博山と茎のついた円形飾り、両端に鴟尾を置く。これは天蓋と屋根の形を融合し、尊像を荘厳するという珍しい形式である。このような天蓋の表現は龍門石窟には見られず、造像碑の中に類例がいくつか認められるものである。

また、第 7、31、34、35、36 龕における主尊造像の造形が近く、特に裳懸座の細部形式が一致する。先端に円形の穴を有する U 字形衣端は、同じ工人グループにより造られた可能性が高いと思われる。

（iii）南壁西側

南壁第 47 龕、49 龕、53 龕を注目する。第 47 龕に見られる天蓋は、南壁東側多く見られる天蓋の形式と異なり、蓋部分に彫り出され混乱が認められる。また、天蓋の下の子幕は簡略化になって、両側の流蘇が丸いになった。主尊坐仏の袈裟の衣紋が浅く彫刻し、足から垂れる布が柔らかい感じがある。両側に広げる裳懸座の奥の部分にもう一つ、孤状の衣端が見られる点において、東側諸龕と異なっている。また、南壁第 47 龕の主尊は二仏並座像であり、南壁の中で、二仏を表現する仏龕は、すべて西側に見つけられる。

南壁第 49 龕における主尊造像の下腹部に非常

に簡略化された二つ U 字形衣端が刻まれ、また左右に広がる裳懸座下縁中央に、おそらく裳の一部と思われる孤状の衣端が見られる。南壁第 53 龕における主尊造像の下腹部に見られる U 字形衣端は、東側諸龕において見られた、先端付近に丸い穴を作る U 字形衣端と異なり、第 49 龕と類似する簡略化された衣端と言える。

（iv）小結

南壁東側における主尊造像の造形が近く、特に裳懸座の細部の技法が類似して、同じ工人グループによって造営された可能性が高い。一方南壁西側では、垂れる U 字形の衣端が簡略され、裳懸座の下縁中央におそらく裳の一部と思われる孤状の衣端が見える。また、二仏並座像を主尊とする造られた仏龕が現れた。そして、亀裂 a、亀裂 b、痕跡 c によって、南壁は東側と西側を分かれることできる。また、西側には 530 年前後の銘文が見られるので、両方の造営時期に差あり、西側の工事が東側より遅れる可能性が高いと思われる。

（4）北壁面

北壁第 15、19、28、29 龕を注目する

（i）北壁第 15 龕

北壁第 15 龕は、南壁第 19 龕との共通点が見られる。また、第 15 龕両側に穿たれた付属小龕を注目する。その中で、第 11 龕の主尊は漢民族式袈裟を着け、その袈裟の裳懸座が 4 つの U 字形衣端を彫り出し、その U 字形の先端付近に丸い穴があるように見える。このような U 字形の衣端は、南壁の東側に多く見られる。一方、第 13 龕は二仏並座像であり、二仏並座像を主尊とする仏龕は、南壁の中で西側だけで見つけることできる。すると、北壁第 15 龕西側の第 10、11、12 龕が、南壁東側諸龕に相当する時期に造られ、第 13 龕とその下の第 14 龕は、南壁西側諸龕に相当する時期に造られた可能性が考えられる。すると第 15 龕は南壁東側と西側の過渡期に造られ、南壁第 19 龕より遅れる可能性がある。

（ii）北壁第 19 龕

主尊二仏は共に漢民族式袈裟を着け、その着け方が異なっている。注意を引くのは、右側の坐仏の裳懸座であり、袈裟の衣紋が浅く刻まれ、両側に広がる裳懸座の下縁中央に弧状の衣端が見られる。これは、南壁第 47 龕と類似している。

（iii）小結

50cm 以上の仏龕において、北壁最大の仏龕で

ある第 15 龕は、南壁第 19 と共通している。しかも、北壁には B1 式以外の仏龕が見られない。50cm 以下の仏龕において、未完成の仏龕が多く見られ、仏龕と仏像の細部の表現が省略されている。北壁は南壁と比較すると、類似点が見られるが、北壁に彫り出された仏龕の数が減り、第 15 龕を除けば仏龕と仏像の表現が粗雑になったことが知られる。

（５）本尊

本尊立像は漢民族式に袈裟をつけ、袈裟の下に着けた紐付きの內衣の一部が、袈裟の上からはみ出している。このような紐付きの內衣の表現は、南壁第 19 龕と類似している。裾の皺の表現も、南壁第 19 龕に近いと言える。そしてこのことから、本尊立仏と南壁第 19 龕は同じ工人グループを造られた可能性が高いと思われる。

5. 結論

（１）水泉石窟の造営過程

外側壁面、北壁入口側壁面と本尊が、造営工事の最初期に造られ、南壁第 19 龕の造営時期は 517 年後が知られた。また、本尊と南壁第 19 龕の主尊と類似し、同じ工人グループを造られたことがわかる。そして、本尊の造営工事を完成した後、南壁第 19 龕の造営が始まった可能性が高い。

南壁は東側と西側に分かれ、南壁東側の第 19 龕は 517 年後に造られた。また、西側には 530 年前後の銘文が見られるので、造営が東側より遅れると考えられる。

入り口側を除く北壁は、壁面の多くが崩落し、仏龕の前後関係を判断することができない。しかし仏龕と仏像の形式について、南壁と比較すると、南壁に現れた形式と類似する仏龕が多く認められ、その中でも特に南壁西側に現れた形式と共通点が見られる。しかし、北壁で最も大きい仏龕である第 15 龕と、南壁の最も大きい仏龕第 19 龕の前後関係の判断が難しいので、南壁と北壁どちら早いのかことが判断できない。また、北壁の中には、未完成の仏龕が多く見られるので、その造営工事が一時中断した可能性があると思われる。

（２）水泉石窟の特徴

水泉石窟には二つの特徴がある。一つは自然の洞窟を利用し、長期間にわたって仏龕の造営活動がなされ、時間の経つ、仏龕の数が徐々に増加した。石窟を造営したとき、計画性は殆ど持っていない、造営に参加した人たちが異なり、彫り出さ

れた仏龕と仏像の形式も異なっている。一方、水泉石窟と龍門石窟の距離は近いが、時間が経つにつれ、水泉石窟内に龍門石窟からの影響が薄れる。外側壁面と北壁入口壁面は龍門石窟で 500 年前後に現れた形式が採用されたが、南北壁面で龍門石窟に見られない天蓋龕を用いた。これは、北魏時代河南地方の仏教造像の地方性の存在を示していると思われる。

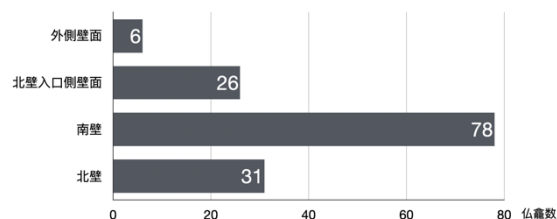


図 8 各壁面の仏龕数 筆者作成

注

- 1) 劉景隆『偃師水泉石窟』, pp.10, 2006.
- 2) 〔北魏〕楊衒之『洛陽伽藍記』, pp.79, 1958.
- 3) 溫玉成「洛陽市偃師縣水泉石窟調查」『文物』, pp.72-77, 1990.
- 4) 劉景隆『偃師水泉石窟』, pp.14-26, 2006.

参考文献

- 1) 宿白「洛陽地域北朝石窟の初步研究」『中国石窟 龍門石窟 2』, pp.227, 1987.
- 2) 雲岡石窟文物保管所 北京大学考古系 編『中国石窟 龍門石窟 (一)』, 1987.
- 3) 楊超傑『洛陽周圍小石窟全録』, 2010.